

Chairman's Correspondence

校訓にある「自立の心」とは？

5月になります。入学、進級して子どもたちは何もかもが新しく、何もかもが新鮮な体験をここ数ヶ月、味わっています。もう運動会！新しい先生、新しい環境でさらに深い実体験活動を積み重ねてまいります。1980年代「自立しないで生きている甲斐があるの？」と言ったのは、英国の初の女性首相だったマーガレット・サッチャー女史でした。個人主義の英国でさえ、社会保障に頼って、何でも国がやってくれという風潮が強まり、「自立」の精神が失われようとしていた時期でした。

教育の目標は突き詰めれば、私は「自立」にあると考えます。

ざっくり言ってしまえば、子どもたちがともかく将来、自分で職業について稼げるようになること。そして税金を払えること…。



「自立」をさらに高いレベルで言えば、自分が「好き」で「得意なもの」を生かして職業に結び付け、「自己実現」していくこと。それが社会のためにとでも貢献できる仕事であれば言うことはありません。

それを求める試行錯誤が「自分探しの旅」と言われるものです。学校では「キャリア教育」と言います。大体は大学や専門学校を卒業するくらいまでに決めていくものですが、その後、変わってもかまわないと思います。

安易に他を頼らず、自分で努力し、創意工夫し、問題を解決しようとする時、一般的に、能力や、才能が身に付き、さらに大きな困難や問題に立ち向かうことができ、結果、成功者になる確立が高いと言われます。

福祉の真髄を述べた言葉に、「自助」と「共助」と「互助」という言葉があります。「自助」とは自立のことです。その人ができることを代わってやってあげても(残存能力を奪うばかりで)、真にその人のためにならないことは皆さんご存知だと思います。反面、本当に困っている人や弱者に手を差し伸べ、共に助け合う。互いに助けあうという「共助」「互助」の精神も大事なことは言うまでもありません。社会はそういう人類愛や連帯感に支えられなければ成立しません。

それを踏まえた上で…子どもたちはまず、校訓にある「自立の心」、たくましさを身に付けていかねばならないと考えています。

Chairman's Correspondence


新学期 姿勢を正しく！


春というより初夏の訪れを感じさせる今日この頃です。5月は軽い話題をお届けします。

人の営みというものは、住めば都、それぞれに工夫して暮らしているものですが、それを「文化」と言います。例えば英国に行ってもまず思うのは車が小さいこと。何百年も続く町並みや石畳を壊すことはせずに、馬車や荷車の時代の道路に走らせる車は、当然小さなものにならざるを得ません。狭いロンドンの町を大量に人を運ぶには、2階建てバスしかなかったでしょうし、道路の下を手で掘った世界最古の地下鉄は世界一狭くて小さいのです。その中で体を縮めて大きな人が乗っているのは何だかユーモラスです。


多くの人が世界中から訪れるロンドンですが、日本人は一目で分かります(自分のことを棚にあげて恐縮ですが)。



 日本人は歩き方がぺたぺた。歩く姿勢がまことに悪い。白人や中国人の様に胸を張って闊歩しないのは学校体育のせい？農耕民族で何百年も肥を担いでいたせい？ともかくリリーでは歩く姿勢を常に注意しています。

 日本人は持ち物だけ豪華で、一点豪華主義なのかグッチのバックだけ光っていたり、たまに全身をブランドで包んで飛行機のエコノミーに乗っていたりする方を見かけますが、これは「金を取ってくれ」と言っているようなものです。

英国ではそういう人はファーストクラス、町は運転手付きリムジンで観光し、決して観光バスなどには乗りません。普通の我々は、観光時はブルゾンとジーパンが安全です。

 そして英国人は夜、パーティやディナーになると、ぐっとおしゃれになります。タキシードやイブニングドレスで颯爽と現れます。昼間と大違い。そんな時、我方はジーパンで出かけていったりしてしまいがち・・・

私はレストランでジャケットとネクタイを要求されたことがあります。「ではまた来ます」と言ったら向こうも商売!!「こちらにおいでください」と言うのでクロークの後ろに案内されると、ジャケットがサイズ別にずらっと並んでいて貸し出し用のネクタイも揃っていました。そんな外国人観光客も多いようです。

これまで私は何回も恥をかきました。いろいろありますが、「郷に入らば 郷に従え」です。特に英国は世界のスタンダードなので学ぶことが多いと思っています。

